令和４年度 日本大学文理学部付置研究所　所員個人研究費　研究実績報告書

所属・資格　　社会学科・教授

申請者氏名　　犬飼　裕一

<table>
<tr><td colspan="2">研　究　課　題</td><td>三世界論と社会学：世界３としての社会</td></tr>
<tr><td rowspan="3">報告の概要</td><td>研究目的および研究概要</td><td>本研究の目的は哲学者カール・ポパーの三世界論や物理学者スティーヴン・ワインバーグの科学論に触発されて、「社会」を世界３の客観的社会実在として捉えなおす社会学理論を探求することにある。社会をめぐる理論探求、社会学理論の営みは、在来的なヨーロッパ思想の「方法論的な個人主義」を疑い、問い直し、修正を迫ることにこそ意義をもつ。ところが、実際には多くの障壁が存在し、社会学理論はいまだに以前の議論を繰り返しているのが現状である。本研究の目的と経過は、在来の社会学理論に代替する三世界論社会学理論の樹立にある。本研究によって世界社会学が、何らかの形でいくらかでも前進できることを願っている。</td></tr>
<tr><td>研究の結果</td><td>本年度の研究では、物理学者スティーヴン・ワインバーグの著書『科学の発見』に触発される形で、「人間が作り出した世界」を科学がいかに論じうるのかという問題を探求した。そんな中、日本ポパー哲学研究会の招聘により「ポパーの三世界論と社会学」というテーマで研究発表を行い、その過程で多くの知見を得ることができた。哲学者カール・ポパーをめぐる専門的な研究においても三世界論については専門家の間で共通認識が成立しておらず、依然として論争が続いている。そんな状況に一石を投じたのが、実は本研究であった。本研究が専門的なポパー哲学研究者にとっても重要な問題提起をなしていることが確認できたという点で、大変に実り多い研究発表であったということができる。また、情報技術分野の専門紙『電経新聞』において連載記事を発表し、IT 技術から AI 技術に移行しつつある社会にあって社会学的な知が果たすことができる役割について問い直すことを行っている。</td></tr>
<tr><td>研究の考察・反省</td><td>本年度の研究では、哲学系の専門研究会（学会）である日本ポパー哲学研究会からの招聘を受けて、ポパーの三世界論と社会学分野での意義について論じる機会を得た。その過程の中で専門的な哲学研究者と社会学的な研究の間の差異について強く意識する機会が得られたことを特筆しておきたい。哲学研究者は抽象的な議論における論理的な整合性に強く関心を抱くが、社会学者はむしろ漠然とした形での「社会問題」に出発して、そこから問題を厳密化していこうとする。まさに、各々の学問の性質をそのまま表現しているといえる。これはまさに学際的な学問研究においてまたとないきっかけとなったといえるし、現にこの機会に得た刺激を基に後年の研究活動をさらに前進させている。</td></tr>
<tr><td colspan="2">研究発表
学会名
発表テーマ
年月日／場所

研究成果物
テーマ
誌名
巻・号
発行年月日
発行所・者</td><td>学会発表
「ポパーの三世界論と社会学」、2022 年 8 月 6 日、日本ポパー哲学研究会、日本大学商学部
学術論文
「科学の発見、そして社会と歴史の再発見：スティーヴン・ワインバーグ、カール・ポパー、歴史主義再考」、『研究紀要』第 104 号（2022）、令和 4 年 9 月 30 日、日本大学文理学部人文科学研究所
「ポパーの三世界論と社会学」、2022 年 12 月、『批判的合理主義研究』、vol.13 No.2、日本ポパー哲学研究会
新聞寄稿
「社会学の反省～「幸せの社会学」に向けて」『電経新聞』3504 号、2022 年 6 月 27 日、電経新聞社
「「バズる戦略」～ネット社会の性質を考える」『電経新聞』3508 号、2022 年 7 月 25 日、電経新聞社
「外されないマスク～同調圧力と道徳」『電経新聞』3512 号、2022 年 8 月 29 日、電経新聞社
「儀礼的無関心、実は強い関心」『電経新聞』3516 号、2022 年 9 月 26 日、電経新聞社
「ネット上の見返りとは？」『電経新聞』3524 号、2022 年 11 月 28 日、電経新聞社
「「バカ」の社会学」『電経新聞』3529 号、2023 年 1 月 30 日、電経新聞社</td></tr>
</table>